

第16話 吉野の朝廷

あしかがたかうじ こうみょういん
 足利尊氏がほしいままに光明院をお立てして天皇と申し上げ、これを奉じて
 ごだいご よしの うつ ひら
 政治を行ったので、後醍醐天皇は大和の吉野に遷られて吉野の朝廷を開かれる。
 なんぼくちょう じだい
 世にいう南北朝の時代が始まる。

たかうじ こうみょういん 尊氏、光明院を立てる

あしかがたかうじ ちょうてき おめい まぬ こうごんいん いんぜん こ
 足利尊氏が朝敵の汚名を免がれんがために、光厳院の院宣を請うたことは前に述べたが、今度、京
 せんりょう と こうごんいん とよひと
 都を占領して天下の政治を執ることとなると、彼は先づ光厳院の弟の豊仁親王を立てて、天皇と申し上
 えんげん ごだいご げん えいざん あんざいしょ
 げた。 実に延元元年8月15日の事です。 しかしこの時、後醍醐天皇は儼として叡山の行在所におい
 につた よしさだ しき かいふく はか じょうい さた
 で、新田義貞らの官軍が頻りに京都の恢復を凶っていたのですから、もとより、ご讓位のご沙汰が
 ま さんしゅ じんぎ つた
 あったわけでもなければ、況して三種の神器をお伝え申したのでもないのです。 それで、後の世の人は
 こうみょういん
 これを光明院と申し上げて、本当の天皇と区別しています。

たかうじ いつわ こうさん 尊氏、偽って降参する

もちろん たかうじ つごう こうみょういん しょうち
 勿論、尊氏としても、自分の都合でお立て申した光明院が、正当の天皇でないことはよく承知して
 ごだいご じんぎ つた
 いた。 それで、いかにもして後醍醐天皇から神器のお伝えを願おうといろいろ考えた末に、ついに10月
 ひそ つか いつわ こうさん
 の初め、彼は密かに使いを、叡山の行在所に遣わして、偽って降参を願い出た。 その時、彼は、
 なん つみ きんしん ざんげん よ いか こうむ
 「わたくしには何の罪もありませんのに、御近臣の讒言に依ってお怒りを蒙りましたのを、新田義貞、
 よしすけ よ ひごろ うつぶん は つい たいらん
 義助らが好いことにして、日頃の鬱憤を晴らそうとしましたので、遂に天下の大乱にもなりましたが、も
 へいか たてまつ むほん くわだ よしさだ ほろ のち ざんげん
 とより陛下に対し奉って謀反を企てたではありません。 ただ、義貞らを滅ぼして、この後の讒言
 こ たかうじ ざん お つみ あわ かえ
 する者を懲らそうとしたばかりです。 尊氏が讒に落ちた罪を哀れとおぼしめして、京都にお還り下さい
 きんしん うら いっさいわすれ かんい りょうち ことごと もと いっさいくち
 ませ。 御近臣に対する怨みは一切忘れ、官位や領地は悉く元のままにし、朝廷のご政治には一切口
 を出しません」と申し上げた。

かんこう 京都に御還幸

ことごと ことば しんよう
 天皇は悉くその言葉をご信用になったわけではなかったが、既にこの時は、叡山の官軍は全く勢い
 おとろ りょうしょく とぼ えんべい み こ しばら たかうじ ねが ゆる しか
 が衰え、糧食の乏しくなった上に、援兵の来る見込みもなかったので、暫く尊氏の願いを許して、然
 のち おもむろ かいふく しゅだん こう よしさだ みこよの
 る後に、徐に回復の手段を講じる事にしようとおぼしめし、10月9日、特に義貞に勅りして、皇太
 つねなが たかなが おもむ さいきよ はか かんこう おお だ
 子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて北国に赴き再挙を凶らせられ、その翌日に御還幸を仰せ出された。

たかうじ たてまつ 尊氏、天皇をおしこめ奉る

たかうじ ただよし とちゅう むか ただ かざん
 尊氏は弟の直義に命じて途中までお迎え奉らしめたが、京都にお着きになるのを待って、直ちに花山
 いん お こ たてまつ けいご も げんじゅう しほう かた とも くぎょうい か かんい うば
 院に押し込め奉り、警護の武士を以って嚴重に四方を固めると共に、お供の公卿以下の官位を奪い、
 と ざいにんあつか じんぎ こうみょういん
 官軍の諸将を捕らえてこれを罪人扱いにしたのみならず、やがて天皇に迫って神器を光明院に伝えんこ

第16話 吉野の朝廷

とを請い奉った。天皇は予ねてこういう事のあろうかと考えられて、偽の神器をご用意になっておられたので、それを光明院にお渡しになり、真の神器はお渡しにならなかった。

吉野に行幸

かくて天皇は花山院に淋しく2ヶ月の月日を送られたが、12月21日の夜、御身を婦人の姿に変えて密かに花山院を抜け出られ、三種の神器を奉じて大和の吉野に行幸され、この地の吉水院に行宮を求めて、天下の政治をご覧になることにした。

河内の楠木の一族を始めとして近国の勤王の武士が馳せ付け、吉野の僧徒らと共にお護りした。時は延元元年12月下旬で、西暦1336年に当たります。

南朝と北朝

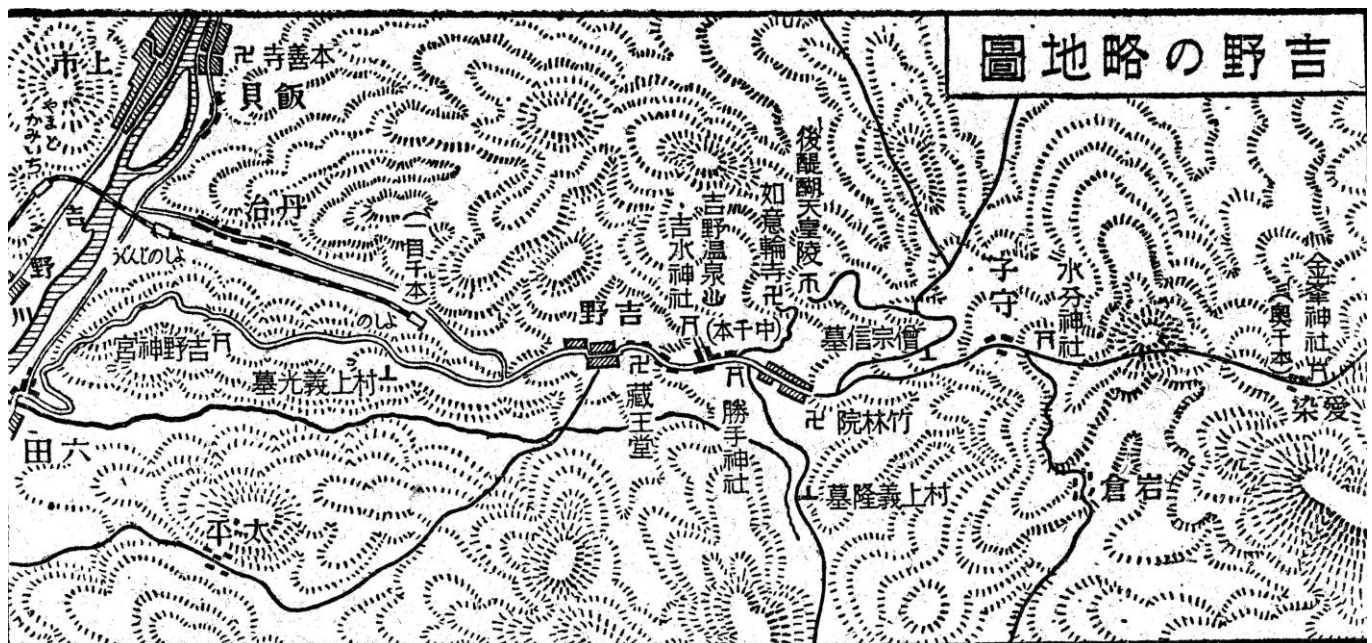
これより世に吉野の朝廷を南朝といい、足利尊氏が欲しいままに立てた京都の朝廷を北朝といった。

所謂公家方の吉野と、武家方の京都とがこれから相



奈良 吉野 吉水神社 (元の吉水院)

対立して、後に、第99代後亀山天皇が北朝の後小松院に神器をお伝えして両朝の合一となるまでの57年間は、実に日本全国が到るところ二派に分かれて、公卿も、武士も、諸国の守護も地頭も、いずれかの朝廷に属して互いの勢力を争ったのです。それでこの時代を普通には、南北朝時代と言っています。



吉野時代

しかしこの呼び方が正しくない事は、前にもいった通り、後醍醐天皇に全くご譲位のご意思が無くて、どこまでも御位を保たれていたのが明らかなので、正しくは吉野時代と呼びます(訳注:最近では南北朝時代と書かれる事が多いようです)。

さて、京都では天皇が花山院をお抜け出しになった事を後に知って、武士らは大いにあわて、東寺の尊

第16話 吉野の朝廷

うじ ほんじん か つ
氏の本陣に駆け付けた者などもいた。

たかうじ たちば 尊氏の立場

しかし尊氏は大いに驚いた様子もなく、「何も心配することはない。天皇が花山院におられると、ご警護や何かで中々面倒だが、とって、北條のように遠国にお遷し申すことも畏れ多い。しかるに、今度、御自分から出て行かれたのは何より幸いだ。いづれ機内のどこかに落ち着かれるであろうが、その辺の事はすべておぼしめしにお任せする外はない」と言ったと伝えられる。ある人は、これを以って、尊氏の度量の大きいのを賞賛して、ある人はいよいよその言う事が怪しからぬとって彼の逆賊ぶりを攻めます。思うに、尊氏から見れば、既に光明院が神器をお受けした後の事で、こちらに正当の天皇（光明院）がおられるのだから、先帝の後醍醐天皇がいづれに落ち着きになろうとも、少しも恐れることはないと思ったのでしよう。

尊氏はこの時、天皇の御座所を捜すよりも、寧ろ天皇に忠義を尽す新田義貞らを早く討って、自然と天皇のご威勢を弱めようとしていたようです。彼は頻りに大軍を発して義貞を北国に攻めました。

（ 第16話 吉野の朝廷 終わり。 次は前頁に戻り、 第17話 新田義貞と北畠顕家 へ）